

科目区分：選択科目

授業科目名：英語教育実践研究

登録学生数：5名

英語コミュニケーション能力と英語教員の知識とスキルを育成する授業

所属・氏名：英語教育講座 立松大祐

## 1. はじめに

本授業では、英語授業実践や学術研究を行うための専門的な知識と技能を習得し、オリジナリティがあり質の高い英語教育研究を構想するための基本的な知識を身に付ける。また、小・中・高の英語授業の実践例と関連する理論的背景（アクティブ・ラーニングや英語4技能の指導に関する研究など）を学び、英語科教員に必要とされる基礎的・応用的な知識と技能を身に付けることを目指している。また、履修者の過半数は教員採用試験の受験を予定しており、本授業を通して英語の読解力とコミュニケーション能力を向上させ、教員試験の筆記及び面接に対応できる力を身に付けさせることも狙いとしている。

## 2. 授業の概要

本授業の目標は、次の4点である。(1) 英語教育研究と実践に関する論文を読み、それを効果的に要約する能力の基礎を養う。(2) 授業実践及び研究概要の発表と質疑応答を通して、英語プレゼンテーション能力を向上させる。(3) 英語教育研究の意義と課題について理解を深める。(4) 英語教師として成長していくための知識と方策について学ぶ。使用する教科書は和書と洋書の2冊である。和書は、中嶋洋一・直山木綿子・久保野雅史（編著）『「プロ教師」に学ぶ真のアクティブ・ラーニング“脳働”的な英語学習のすすめ』（開隆堂）、洋書は Nunan, D.（著）*Teaching English to speakers of other languages: an introduction* (Routledge)を使用した。英語専攻の学生は卒業研究を英語で執筆するため、そのモデルとなる英文を大量に読む学習が必要と考えた。英語の文献を扱う授業回では、学生による発表や質疑応答、ディスカッションなどをすべて英語で行うことを授業の方針とした。

本授業の開講は前期であり、今年度は、新型コロナウイルス感染拡大により対面での授業ができず、遠隔授業の環境が整うまでは Moodle を活用して遠隔（非同期型）授業を実施した。教科書の該当ページ読み、要点をレポートにまとめるという内容が中心であった。4月の第3回目の授業か

らは、Microsoft Teams を活用して遠隔（同期型）授業を始めることができた。本授業の授業計画を表1に示す。

表1 授業計画

回	内容	教科書
1 4/13	Moodleによる学習 言語教育のメソドロジー の変遷について	Nunan Ch. 1
2 4/20	Moodleによる学習 アクティブ・ラーニングの 理念と授業づくり	中嶋他 1章 pp.16-68
3 4/27	学習者中心の英語教育	Nunan Ch. 2
4 5/11	小学校実践例1 (児童の伝えたいという 意欲を引き出す授業)	中嶋他 2章 pp.90-99
5 5/18	リスニング指導の研究	Nunan Ch. 3
6 5/25	小学校実践例2 (中学校との接続を考え た指導)	中嶋他 2章 pp.100-109
7 6/1	スピーキング指導の研究	Nunan Ch. 4
8 6/8	中学校実践例1 (バックワード・デザイン による指導計画)	中嶋他 2章 pp.150-161
9 6/15	リーディング指導の研究	Nunan Ch. 5
10 6/22	中学校実践例2 (インタラクション中心 の指導)	中嶋他 2章 pp.162-177
11 6/29	ライティング指導の研究	Nunan Ch. 6
12 7/6	高等学校実践例1 (思考・創造・表現力の向 上を目指した授業改善)	中嶋他 2章 pp.204-219
13 7/13	文法指導の研究	Nunan Ch. 9
14 7/20	高等学校での実践例2 (教科書題材から自己表 現につなげる授業改善)	中嶋他 2章 pp.234-247
15 7/27	学習スタイルと学習スト ラテジーの研究、まとめ	Nunan Ch. 11

表1の授業計画からも明らかなように、和文文献の内容は授業事例を実践者が記述しており、教員志望者にとってはかなり実際的な学びのあるものとなっている。それに対して、英語文献は、実際には授業実践例も記述されており実際的な内容であるが、先行研究などの理論的まとめがあるなど、卒業研究を英語で書くためのガイドともなっている。第3回の授業からは、和文文献の場合は一人の履修者が課題文献の概要説明をし、質疑応答やディスカッションができるように、あらかじめ質問を考え、議論するポイントを準備しておくことを指示した。英文文献の場合は担当を二人とし、課題を分割などしてもよいが、二人とも課題の全てを読んだ上でプレゼンテーションを行うよう求めた。担当者ではない受講者は、あらかじめ課題を読み、いくつか質問を準備して授業に出席するよう指導した。また、先述のとおり英文文献の場合は英語でのプレゼンテーション、質疑応答、ディスカッションを行い、和文文献の場合は日本語で行うこととした。

登録履修者が5人であったため、各学生は4回ずつ発表の担当者となり、授業期間中はかなりの時間を予習と発表準備に費やしたと思われる。特に、英語文献の担当者はこのような授業方法に慣れていないため、まず英文を精読することにかかなりの時間がかかり、そのあとにプレゼンテーションのスライド準備をして、それらをどのように英語で伝えるべきかを計画することになるからである。つまり、この学習を通して時間をかけて総合的に英語力を向上させることができる可能性があるのである。そのことは、教員採用試験の英語のテストや面接、模擬授業においても十分に対応できる力を身に付けさせることができるであろう。

この授業の履修者の少なさはコミュニケーション能力向上のためには有利に働いている。遠隔授業であっても、お互いの表情を見ながら円滑にコミュニケーションを行うことができたからである。人数が少ない分、誰かが意識して会話を継続させようとしなければ、コミュニケーションが止まってしまう恐れがあるが、今年度の履修者の特徴も活発なコミュニケーションを生む要因になっていると考えられる。5人中の4人がアメリカへの短期研修経験者であり、残りの1人はカナダでの長期留学経験者である。さらに、短期留学経験者のうち2人は今年度中に長期留学を計画しており、英語でのコミュニケーションへの動機づけも高いと判断できるからである。さらには、5人中の3人が教員採用試験を受験予定であったため、英語

教育の実践例を中心に扱う内容への関心が高いと言える。

授業は基本的には学生主導で進めることができた。担当の学生が事前に発表資料などを準備した場合にはMoodleコースにアップロードし、各学生は授業までに資料にアクセスするようにし、内容を確認してから授業に参加することができた。担当学生は文献が書かれている言語により、日本語あるいは英語でのプレゼンテーションを行った。発表後には質疑応答やディスカッションのための時間を設け、学生同士の活発な意見交換が行われることを期待した。質疑応答が難しい際には、教員から質問をしたり、ディスカッションのためのトピックを提供したりした。本授業を通して、英語授業実践や卒業研究のための基本的な知識とスキルを身に付けることができたと考えている。また、就職活動中で愛媛県を離れている学生にとっても、さまざまな場所から授業に参加することができたため、オンラインでの授業にはメリットがあったと言える。

### 3. 学生のアンケート結果（授業評価）と課題

授業評価では、まず、各学生が本授業の準備のためにどれくらいの時間を費やしているかを確認したところ、平均4.2時間（最大値は5）であった。また、「この授業の課題や予習・復習以外の理由で、この授業に関連して時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度か」の結果は平均2.5時間（最大値は5）であった。アクティブ・ラーニングの授業スタイルのため、学生は授業準備に時間をかけていることが明らかになった。さらに、この授業を受けて、自分で自発的に読んだ本や論文の数を問う設問には4人が2本、1人が1本と回答しており、積極的に学習している態度が読み取ることができる。

次に、授業を通して身に付けさせたい力にどれくらい迫れたかを確かめたい。「英語教育の論文を読み、効果的に要約する力が身に付いたか」という設問には、3人が「とてもそう思う」、残り2人が「ある程度そう思う」と回答している。英語でのプレゼンテーション能力が向上したかをたずねる設問では、2人が「とてもそう思う」、3人が「ある程度そう思う」と回答している。最後に、「英語教師として成長するための知識と方策を身に付けることができた」という設問には5人全員が「とてもそう思う」と回答した。これらの結果から、学生は本授業での到達目標を概ね達成できたと言えることができる。

次年度への課題は、学生同士の質疑応答やディスカッションの質と量をさらに向上させることである。そのためには、各文献を読む際に、あらかじめディスカッションのためのヒントを提示したり、一人につき必ず2～3個の質問を準備してから授業に臨むようにしたりなど授業ルールを徹底することも必要かもしれない。

#### 4. 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」

松山市内の中学校で学習アシスタントをする履修者にとっては、授業で学習した内容はすぐに実習校にて確認できたり、再考できたりしており、理論と実践を往還させることができている。また、3人の履修者が中学校の教員採用試験に挑み、無事に合格することができた。来年度からそれぞれの赴任校にて、本授業での学びを英語の授業に生かすことができる場面が多々あることを願っている。